ずいそう

“被災者の立場”と“土木技術者の視点”から見た8・20広島市土砂災害

柳　瀬　健一郎

『青天の霹靂』（せいてんのへきれき）とは，まさにこのことである。

平成26年8月20日，まだ夜も明けぬ午前5時前。広島に家族を残し，山陰の実家に身を寄せ，単身勤務をしている私の下にかかった家内からの携帯電話で飛び起きた。

「家の前の駐車場が泥と水で埋まった。車も見えない。今，マンションの人達みんなで屋上に避難している。」

写真―1　自宅マンション前（右側）を覆う土石流・ガレキ

滅多に電話を寄越さない家内から，しかもこんな時間に携帯が…。ただ事ではないことは即座に判った。が，それにしても「泥と水で車が埋まる？」，「マンション屋上に，みんなで避難？」…。

崩れるような“裏山”や，溢れるような川なんか，ないけどなぁ…。さっぱり状況が理解出来ないまま，とりあえず，安佐南区八木の自宅に戻ることにした。

広島に向かう道すがら聴いていたカーラジオからは，安佐南区八木・緑井・山本，安佐北区可部，といった聞き覚えも土地勘もある場所での「土砂崩落」・「住宅崩壊」・「3人が生き埋め」・「2名の死亡を確認」といったショッキングな報道が続き，これが前日の深夜から当日未明にかけて広島市北部地区を襲った記録的な豪雨による，同時多発的な大規模土砂災害であることを，時間の経過と共に刻々と詳細に報じ続けた。

そして家内の言う「泥と水」とは，マンション背面に遠くそびえる標高約600 mの阿武山（あぶさん）の，幾つもの沢からの土石流であることを，夕方に辿り着いた自宅の惨状を目の当たりにし，ようやく実感した。

幸いなことに家族に被害はなく，安否も早い段階から確認できていたことから，大災害であった割には比較的落ちついて行動出来たのは不幸中の幸いであった。ただ，住居を失うということは，大きな負担と心労の種となる。結局その夜からの仮の住まいでの生活は，半年近く続くこととなった。

テレビや新聞，あるいは支援業務で訪れた，阪神淡路大震災や東日本大震災（東北地方）で被災された皆さんの気持ちを初めて実感し共感もした。やはり生活の拠点・ベースが定まらないと，精神的に落ち着かず，生活のリズム全てを乱すものである。

一方，私は地方の建設コンサルタントに勤務する土木技術者でもある。今回の災害に直面し，技術的な事象分析や工学的評価を行い，「人々の安全や安心を守る」という土木技術の本分を果たすことが，まず，我々に出来る「復興支援」と考え，社内の土質・地質を専門とする技術者（技術士・地質調査技師）に声を掛け，現場の救助・復旧作業が落ち着いた9月10日に，社員5名による現地調査を実施し，被災状況や発生のメカニズム，今後の望ましい復旧・復興計画案等をとりまとめ，社内研修会の場で調査報告・討議を行った。

今後，同様の計画・設計等業務に従事する際には，今回の経験を活かし，エンドユーザーである住民の生命を守ることを基本姿勢とし臨みたいと考えている。

文末になるが，この度の災害で犠牲となり，図らずも尊い命を落とされた74名の方々のご冥福を心よりお祈りすると共に，ご家族の皆様に対し，深い哀悼の意を表するものである。

写真―2　社内研修会：「現地調査報告会」の様子

――やなせ　けんいちろう　㈱トーワエンジニアリング　技術部　部長――